

漢文 句形 まる見え1枚シート

白文から「書き下し」と「訳」でまる暗記。漢文の点数は句形でほぼ決まります。字を見たら→型で読む→訳す、の3ステップを反射でできるようにしよう。

★★★ 入試超頻出

★★ よく出る

★ 余裕があれば

💡 覚え方

▶ 例文

否定

▶ 二重否定・禁止

▶ 疑問・反語

▶ 使役・受身

▶ 比較・假定

▶ 限定・抑揚

まずは否定と疑問・反語を完璧に。反語(あに～や)は「いや、～ない」と必ず逆の意味で訳すのが重要ポイント。

読む順: 左の列を上から順に ▶ 終わったら 右の列へ (見出しの番号が順番です)

1 否定 — まずはこの4つ

字	頻出	書き下しの型	訳
不・弗	★★★	～(せ)ず	～ない
未	★★★	未だ～ず	まだ～ない
無(无)	★★★	～(は)なし	～がない
非	★★★	～(に)あらず	～ではない

💡 「未」は再読文字。一度「いまだ」と読み、返ってもう一度「ず」と読む。点を打つと「未ダ～ず」。

▶ 例文: 過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ → 過ちを犯して改めない、これを過ちという。

▶ 例文: 未だ仁を好む者を見ず → 仁を好む者をまだ見たことがない。

2 二重否定 — 否定が2つで強い肯定に

字	頻出	書き下し	訳(プラスの意味になる)
無不	★★★	～ざるは(も)なし	～しないものはない=みな～する
非不	★★	～ざるにあらず	～しないのではない=確かに～する
不可不	★★★	～ざるべからず	～しなければならない
無非	★★	～にあらざるは(も)なし	～でないものはない=すべて～だ

💡 否定×否定=強い肯定。「無不」=しないものなし → 「みんなする」、「不可不」=しないでいられない → 「絶対する」と頭の中で言い換える。

▶ 例文: 聞く者為に流涕せざるは無し → 聞く者で涙を流さない者はいなかった(=みな泣いた)。

▶ 例文: 学ばざるべからず → 学ばなければならない。

3 禁止 — 「～なかれ」

字	頻出	書き下し	訳
勿・莫・無・毋	★★★	～(する)(こと)なかれ	～してはならない・～するな

💡 「無・莫」は二刀流。文頭で「なし(否定)」、命令的に使うと「なかれ(禁止)」。前後の意味で判断。

▶ 例文: 己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ → 自分が望まないことを、人にしてはならない。

4 疑問 — 素直に「～か」と問う

字	頻出	読み・訳
乎・哉・也(文末)	★★★	～(や・か) / ～か
何	★★★	なに(何を)・なんぞ(なぜ)
誰	★★	たれ(だれ)
安・焉・惡	★★	いづくんぞ(どうして)・いづくにか(どこに)

疑問詞 文末助字

💡 文末の「乎・哉・也」は「や・か」と読んで疑問を作る合図。疑問詞(何・誰・安)とセットになることも多い。

▶ 例文: 吾誰をか欺かん → 私はいったい誰を欺くというのか。

▶ 例文: 何為れぞ泣くや → どうして泣くのか。

5 反語 — 「いや、～ない」が命

型	頻出	書き下し	訳(必ず逆の結論に)
豈～(乎)	★★★	豈に～(ん)や	どうして～か、いや～ない
何～(乎)	★★★	何ぞ～(ん)や	どうして～か、いや～ない
安～(哉)	★★	安くんぞ～(ん)や	どうして～か、いや～ない

💡 疑問と反語の見分け=文末が「～ん(推量・意志)+や」になっていれば反語。訳は必ず「いや、～ない」と反対の結論で締める。これが配点の山。

▶ 例文: 燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや → ツバメやスズメ(小人物)にどうして大きな鳥(大人物)の志がわかるるか、いやわかるまい。

6 使役 — 「人をして～しむ」

型	頻出	書き下し	訳
使・令・遣・教+人+動詞	★★★	人をして～(せ)しむ	人に～させる

💡 形は「使AB」。A(人)をして、B(動作)しむ。「しむ」が出たら使役と即断。使・令・遣・教は「シレケンキョウ」とまとめて覚える。

▶ 例文: 王、人をして之を視しむ → 王は、人にこれを見させた。

7 受身 — 「～(ら)る」

型	頻出	書き下し	訳
見・被+動詞	★★★	～(せ)らる	～される
為A所B	★★★	AのBする所と為る	AにBされる
於(于・乎)+人	★★	～(人)に～(せ)らる	(人)に～される

💡 「為A所B」は受身の超頻出パターン。「為」+「所」を見たら「AにBされる」と機械的に変換。

▶ 例文: 信にして疑はれ、忠にして謗らる → 誠実なのに疑われ、忠実なのにそしられる。

▶ 例文: 先んずれば則ち人を制し、後るれば則ち人の制する所と為る → 先んじれば人を制し、遅れれば人に制される。

8 比較・選択 — 「～にしかず」

型	頻出	書き下し	訳
不如・不若	★★★	～(に)しかず	～に及ばない・～のほうがよい
A孰与B	★★	AはBに孰与(いづ)れぞ	AとBとどちらが～か
莫如・莫若	★★	～(に)しくは(も)なし	～に及ぶものはない=～が一番だ

💡 「不如B」=Bに及ばない=Bのほうがよいと、後ろのBを高く評価する向きで訳す。「莫如B」は最上級「Bが一番」。

▶ 例文: 百聞は一見に如かず → 百回聞くのは一回見るのに及ばない(見るほうがよい)。

9 假定 — 「もし～ば」「～といへども」

字	頻出	書き下し	訳
若・如・苟	★★	若(も)し～ば	もし～ならば
雖	★★★	～(と)いへども	～であっても・～だけれども

💡 「雖」は逆接の假定・確定どちらも。「たとえ～でも」か「～けれども」。前後の文脈で訳し分ける。「苟(いやしく)も」は「仮にも・もし」。

▶ 例文: 千里の馬は常に有れども、伯樂は常に有らず → 名馬は常にいるけれども、見抜く伯樂は常にはいない。

10 限定 — 「ただ～のみ」

字	頻出	書き下し	訳
唯・惟・独(文頭)	★★	唯(た)だ～	ただ～だけ
耳・而已・爾(文末)	★★★	～(の)み	～だけだ・～にすぎない

💡 文頭「唯」+文末「のみ」で挟むのが完全形=「唯だ～のみ」。文末の「耳・而已」を見たら「のみ」と読み限定の合図。

▶ 例文: 直だ百歩ならざるのみ → ただ百歩でないだけだ(五十歩百歩)。

11 抑揚 — 「いはんや～をや」

型	頻出	書き下し	訳
況～(乎)	★★	況(いは)んや～をや	まして～はおさらだ(当然だ)

💡 抑揚=軽い例で抑え、重い例を揚げる。前に「且・尚(すら)」が来て「Aすら～、況んやBをや(Aでさえそうだ、ましてBは当然)」の形が定番。

▶ 例文: 死馬すら且つ之を買ふ、況んや生ける者をや → 死んだ馬でさえ買うのだ、まして生きた馬はなおさら(買う)。